
平行世界を巡る（仮）

平民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平行世界を巡る（仮）

【著者名】

ZZマーク

1

【作者名】

平民

【あらすじ】

この物語は一般人の主人公の日常が非日常に変わり、その中でどのように生きていくかの話です。

注意このことはフィクションであり、実在する物とは一切関係ありません

注意書き（前書き）

22時に書いたのにもうこんな時間だよ

注意書き

この物語を読むための注意点があります。

- 1 この作品は作者が中学生のときに考えていたものであり、最近思い出しどんなものだったかを整理するための自己満足的物語です。
- 2 上に書いた通り厨二病全開のぐだぐだな物語になります。なので嫌な方は戻るボタンを押すなりブラウザを閉じてください。
- 3 更新は毎日を目標しますが忙しいときは2日～7日かかるかもしれません。

この3つの注意点を見てそれでもいいーとこの方のみ先に進んでください。

注意書き（後書き）

後悔も反省もしている

プロローグ（前書き）

やはり反省も後悔もしている

プロローグ

また新しい朝が来た。俺は目覚まし時計を止めて布団からでて朝食を食べるためリビングに行く。

眠い。かなり眠い。昨日遅くまでゲームをやっていたからか？ そつ思いながらリビングまで進んでいく

「おはよー」

「おはよー」

挨拶をしてきたのは母である。俺は自分の席に行き朝食のトーストと皿玉焼きを食べる 食べる

「おはよー」

そういう歯ブラシをとつて行くと歯磨き粉をつけて歯を磨く。

なぜ、歯を磨くのか思いながら磨く

面倒になつてみたのすぐにやすぐ。寝癖をとるのを忘れず。

「行つてきます」

そういう学校へ行く。学校までは10分ほどで着く。その間にこの前見ていたネット小説を思い出す。

たしかアニメを題にした転生物である。まあ、現実では起きないことなので軽く読んでいた。しかし、非現実的だから面白く感じるのであり現実だつたらヘタレでチキンな俺は逃げるに違いない、そういう思い。そんなことを考えると学校に着くいつもと同じような時間に着き教室に着く。

「起立。礼。着席。」

その命令で今日の学校は終わりだ。授業はつまらないもので飛ばした。このような平々凡々な日常を1~4年繰り返してきた。やはり、家に帰りさと宿題を終わらせパソコンの電源をこれネット小説を見るやはり転生物である。

「寝るか」

そうつぶやき電気を消し就寝する。また、同じじとの繰り返しだ。だからいつ思いこいつつぶやいた

「INの日常がファイクションのようにになればなあ

しかし、俺はこの独り言を後悔した。

なぜなら……

あのようなことが起るとはおもわなかつたからだ。

プロローグ（後書き）

かなり短いし、恥ずかしいです

第一話 口常の邊境（前編）

作者の妄想なので軽く流してもらいたいあります

第一話 田常の醜態

また新しい朝が来た。俺は田覚まし時計を止めて布団からでて朝食を食べるためリビングに行く。

眠い。かなり眠い。昨日遅くまでゲームをやっていたからか? さつ思いながらリビングまで進んでいく

「おはよう」

「おはよう」

挨拶をしてきたのは母である。俺は自分の席に行き朝食のトーストにジャムを塗ったものを食べる

「おはよう」

そうここ歯ブラシをとつて行くと歯磨き粉をつけ歯を磨く。

「こつてきます。」

そういう学校へ行く。やはり昨日と変わらない田常だ。
変わらない毎日に少し残念な気もするが、これは仕方がないことだ。

「おはよう。」

「おはよう。」

「なあ、宿題やつてきたか? やつてきたら少し見せてくれねえ?」

「なあ、宿題やつてきたか? やつてきたら少し見せてくれねえ?」

俺は無言でノートを渡す。

「サンキュー。」

そういう自分の席に戻る倉内、さてと朝の会が始まるまで寝ようかな?

「はい・・・席についてください・・・」

?なぜあんなに先生の顔が青いというか汗をかいているんだ? そういう思ひ

全身黒いコートのような服で身を包んでいた人が入ってきた

「せんと・・・今からゲームを始めよ!」

は? ゲーム? 何だよゲーム? そう思つとクラスの一人の石田が

「何がゲームだよ! ふざけるんじゃないねえ!」

そう怒鳴つた。なぜか先生は黙つてうつむいて立てる。さうすると

「黙れ。」

そういう黒コートの男? は銃を取り出す。そして・・・

引き金を引き

石田の頭を打ち抜いた・・・

「う・・・・・・うわああああああ」

そう誰かが叫んだ。隣の席の山府だけ？そいつが狂ったようだ。び、そのほかのクラスの人は吐いたり、気絶したり、叫んでいる。俺は寝ぼけていた。だからこれは悪い夢だと思っていた。そう悪い夢だ

そう思つて現実から目をそむけようとしたら

「静かにしり……」

そつ黒マークの男が囁つ

「これは現実だ！これが悪い夢だと思っているやつもいるんだろうがこれは夢じゃない！！現実だ！今からゲームを行つための説明の邪魔をするから」「うなる……」

そつ黒マークの石田を指差す

「ううこのようになりたくないなら静かにしり……」

そつ黒マーククラスのやつは黙つた

「よし。これからゲームの説明をするために体育館に行つてもうう。分かったな。」

そう男が言い終わると我先にドアを開けていよいよする。俺も最後のほうについていく。

（体育館）

「これからゲームを始めようと思つ……ゲームの参加者はこの学校にいる生徒と教師たちだ！ルールを説明する…ひとつこれから行われるのはバトルロワイアルすなわち殺し合いだ！」

ざわざわと体育館に集まつた人たちがざわめき始める。そんなことお構いなしに話を進める

「ふたつ…これが終わるのは最後に一人生き残るまでだ！もしも生き残れたなら何でも願いをかなえてやろうつ…」

なるほど。そう何故か冷静なまま話を聞いている。

「みつつ…共同戦線を張ろうが同盟を組もうがかまわない！ただし最後の一人になるまでゲームは終わらないがな。」

同盟を組んだり戦線を張つても意味がないだろうに、なぜなら最後まで生き残れるのは一人なのだから

「以上だ…質問のあるやつは手を上げてみる。」

そういうこの学校の生徒会長が

「「Jのまま戦う物なしに殺し合つて」というのか？」

「安心しろ。道具なら今からクラス」とに元へじを引かせてやる。

「Jの学校には四百人近い人たちがいるんですよ？そんな数用意できるんですか？」

「できるからやれと言つてゐるんだらう! 道具はたくさんあるだらう? 同じもので数種類あるものとかひとつしかないものとかお前らの知つてゐるアニメなどの物まであるだらう。」

「そういわれると、クラスにいるアニメや漫画好きの人ゲーが小声で「やつた」とか「これで生き残れる!」とか口々に言つてゐる。

「他にはいなか? よしこのお前。」

「「」」ことは国や政府は知つてゐるんですか?」

「ああ、今日の「」コースで見ただらう? 政府が脅迫を受けたことを。それだからこのことは大丈夫だ。むりに他の学校でもやつてゐるからな。」

嘘だ・・・・と呟きその生徒は座つた。そりや、死刑宣告をされたよつなものだからな

「話は以上だ! 各自教室に戻り細かい説明や道具を受け取れ!」

そつこい終わると他の生徒は思い足取りで進んでいった。

第一話　日常の崩壊（後書き）

黙文ですみません

第一話 下準備（前書き）

基本地の文は主人公視点です

第一話 下準備

体育館から戻ってきた俺たちはクラスに戻ってきた。

「今から生き残るための道具をやる。出席番号順に来い。」

そう黒マントの男が言うと次々にくじを引いていく

「次。」

俺の番が来た。すごい緊張しているのが自分でも分かる。心臓が早鐘のようになり、手汗が異常なほど出ている。俺はくじの入った箱からくじを引いた。37番だ。なぜ誕生日なのか分からなかつた。

そして次々に引き、終わると

「さあ廊下に行き自分の番号の物の中身を確認するんだ。まずは一番を引いたやつからだ。」

そのまま次々に前のドアから出て行き後ろのドアから入ってきた。その顔はうれしそうなやつとがっかりしたやつ、この世の終わりだといつ顔をしていくやつだ。

「37番!」

そういわれ廊下に行き箱を受け取る・・・一つも。俺が不思議そうな顔をするとその箱が動いた。
がさごそと揺れたのだ。一つとも俺は驚き落としかけた。危ない、危険物だったりどうしようかと思つた。

「よしこれでこのクラス39人に行き渡つたな。死んだやつの道具はこちりで回収しよう。少しの時間をやるからその間に中身を確認しておけ。」

そういわれたのでみんながあけ始める。俺も一つ開けた。中からでてきたのは

一匹の狼みたいな小さい獸と一匹のこれも小さい鳥だった

第一話 下準備（後書き）

このまま黙々とやく進めていきたいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7205z/>

平行世界を巡る（仮）

2011年12月25日16時51分発行